

年の美しい人妻波多野秋子との恋愛を契機に、かれは、わたしがかれの講演を後にも先にもただ一度だけ聴いた年の、その翌年、1923年6月9日、かれは軽井沢の別荘・浄月庵で秋子と情死するに至ったのである。

わたしはワイルドの生涯における現実＝人生と創作＝藝術との、ほとんど宿命にも似た対決を考えるたびに、いつもこの武郎の末路を想起しないではいられないのだ。ひそかに巷間伝えるところによれば、ふたりの遺体には蛆が這いまわっており、さらに、1916年に結核を病む妻・安子に死別して以来、きびしい禁欲生活をつづけていたため、かれの男性自身は事に臨んでついに機能しなかった、という。

さて、オスカー・ワイルドの全作品——詩、小説、童話、劇および評論・講演——を通じて、たえず執拗なまでに繰りかえし明滅する最大の主題は、まさに人生＝現実と藝術＝創作との、およそ単純でしかも複雑きわまりない相関、ということとあってよいであろう。

たとえば、それはまず評論「嘘の衰退」において提示され、「新しい美学の原理として、つぎの三つが挙げられる。すなわち、1.「藝術」はそれ自身のほかの何物をも断じて表現しない。2.「あらゆる劣悪な藝術は『人生』と『自然』へ還ること、そしてその二つを理想にまで高めることから生じる。」3.「藝術」が「人生」を模倣するよりもはるか以上に「人生」こそ「藝術」を模倣する。これは単に「人生」の模倣本能に由来するのみでなく、「人生」の自意識的な目的は表現を発見することであり、かつ「人生」がそのエネルギーを実現できるようなある種の美しい形式を「藝術」が提供することからも来ているのである」(私訳『ワイルド全集』IV, pp. 47-9)。

いいかえれば「人生とは環境に規制されたものであって、その表現は支離滅裂であり、藝術的で批評的な気質を満足させる唯一のものであるあの形式と精神のみごとな照応に欠けているのだ。人生はその品代には高すぎる代価をわれわれに払わせる、そしてわれわれはこの上なくつまらない秘密を目の玉の飛び出るような値段で買いとるのだ」(同書, pp. 131-2)。そうして、ここでわたしたちは思い出すであろう、ワイルドがアンドレ・ジッドに語った、あの有名な、あまりにも有名すぎる言葉、つまり、「わたしが自分の天賦の資質 *genius* を捧げたのは「人生＝生活」であり、「作品＝藝術」に投じたのは単なる才能 *talent* にすぎない」という冗談めかした打ち明け話を。

これを若いジッドがどう受けとめたかはとにかくとして、わたしたちとしては次のようなワイルドの発言をもまた忘れるわけにいかない——「人間が求めてきたのは、実は、苦痛でもなければ快樂でもなく、ただ『人生』にはかならないからだ。人間は生きようとしてきたのだ、はげしく、ゆたかに、完璧に」(「社会主義下の人間の魂」)。それから、「藝術は人生のために作られるのであって、人生が藝術のためにあるのではない」(「衣服と藝術との関係」『ワイルド全集』V, p. 44)。

このような人生派ワイルドが、なぜ、いまわしい投獄という形で現実人生に敗れさった

のか？ なぜ『獄中記』と『レディング牢獄の唄』の作者は出獄後の僅かな余生を流浪と敗残のうちに過ごさねばならなかったのか？

おそらく答は三つしかないであろう。ひとつは「社会はしばしば犯罪者を許しはする。夢想家を許すことは断じてない」(『全集』IV, p. 133)。ふたつは、ワイルドが、とくに劇において、えもいえず魅力的に楽しませてくれたこと、そして、あれほど聡明な人間ワイルドが、その藝術ゆえに人生の現実と迂闊で、そのため恐ろしい呪いと復讐を受けたのである。あの鬼龍院花子の啖呵ではないが、「なめたらいかんぜよ！」

## 『獄中記』について

古川 弘之

(光華女子大学教授)

ワイルドの『獄中記』(*De Profundis*)は3個の点ではじまっていた。これは前に省略された部分があることを示すものであるが、本文のなかにもこの削除を示す3個の点が見られることがある。今日では完本が普及して削除版を手に入れることの方が難しいのであるがロバート・ロス(Robert Ross)が1905年にこのワイルドの手紙を公にしたときはかなり削られたものであった。

その成立について復習しておきたいと思う。タイトルもロスによるものであるがルーカス(E. V. Lucas)がこの「深き淵より」という案を出したのだと言われている。ワイルドは1835年5月25日に2年間の重労働を含む懲役の刑を言いわたされた。そしてレディングの刑務所に移されたのは11月21日である。彼は1837年のはじめに(1月から3月まで)このレディングの刑務所で「愛するボジーよ」ではじまる手紙を書いたのである。二折版の用紙に24枚の長さである。手書きの原稿が一枚書き上げると次に新しい用紙が手渡されるという刑務所内の制度の下で書いていったものである。完成した後に4月1日付でロス宛の手紙は、このアルフレッド・ダグラス宛になっている原稿の処理についてのものである。<sup>注1</sup>

親愛なるロビーよ、わたしは、これとは別の包みで、アルフレッド・ダグラスあての手紙を送る。無事に届くといいが。きみは、またもちろんいつもきみと一緒にしているモア・アディーが、それを読み次第、注意深くコピーしてほしい。

複写は薄用紙ではなく台本用の上質紙を使ってほしい。それに広い赤表題をつけた欄を訂正用に残しておくべきだ。複写を草稿からとって確証されたら、原本はモアによってA. D.へ送られ、タイプでもう一部作る、そうすればわたし同様きみも一部持てるわけだ。注2 また第九綴の第四頁から第十四綴の最終頁までと、「そしてその最後に... わたしは君を許さねばならぬ」から「芸術とわたし自身のあいだには何もない」（そらで引用するのだが）までは二通タイプで打ってほしい。また第十八綴の第三頁の「もし万事うまく行けば釈放されるはずだ」から第四頁の「全部... 苦草」まで。\* これらを意図がよくすぐれたもの、たとえば第十五綴の第一頁から抜粋できるほかの何かとつなぎ合わせて、一通をウィンプルドンの婦人——名前を出さずに、話をしたことがあるが——に、もう一通をフランキー・フォース・ロバートソンに送ってほしい。

御存知のようにこの手紙はレディングから郵送されずにワイルドが5月19日釈放されたときに彼に渡されたのである。場所は最初に収監されたワズワースの刑務所からであった。そしてワイルドはロスにこの原稿を手渡したのであった。それ故、上に引用した手紙の指示通りには原稿が届かなかったのであるから実行されなかったのであるが、これを受取ったロスはタイプしたコピーを2通作ってその1通をアルフレッド・ダグラスに送ったとのことである。ワイルドの手紙には「原本はモアによってA. D.へ送られ」とあるが、ロスはそのようにしなかったと言う。ダグラスの方はタイプされたものも受取っていないと言っているようで真相はわからない。

ロスは半分以下の量に削って、ダグラスの名前も全然出さずに1905年に公にしたのである。これが省略符ではじまる *De Profundis* である。そして1908年に Methuen 社から出た Collected Edition注3 に入れられたときに少し量がふえたのであるが、われわれがその大部分を読むことができるようになるには1949年にワイルドの次男のヴィヴィアンが出したもので待たねばならなかった。しかしこの版にもミスがあって、1962年の *The Letters of Oscar Wilde* になって完全なものになったとされている。

削除版とはすっかり違ったものを読むことができるようになったのであるが、これは逆にこれまでの『獄中記』がすっかり違ったものとなって公にされてきたということである。この削除版によってワイルドを違った風に (as he is not) 見てきたのである。しかしこのように見ることはワイルドの主張していたことではないだろうか。わが国でも早くから数種の訳が出ているが、これらは削除版によるものであった。現在は河出文庫のリバイバル・コレクションのなかに田部重治訳が復刊されているのが唯一のものである。もとの原稿とは異なるのだがひとつの作品として読めば興味深いものであり、われわれは2種類の『獄中記』をもっているもよいのではないだろうか。

注1 引用は西村孝次先生の訳（青土社版『全集』）を使わせていただいた。

注2 青土社版『全集』にあるこの注は\*印のところにあるべきもの。原書の注の3が2といれ替って邦訳の注となっている。

注3 このあたりのテキストについても調べるべきことが多い。

## イエスに美を見たワイルド

山口 哲生  
(活水女子大学教授)

獄に下るほんの5日ほど前に、ワイルドがダグラスに宛てた手紙には、「私の美しい薔薇よ、優美な花よ、百合のなかの百合よ」と書いてある。それが『獄中記』になると、「私を獄に入れたのは、君の父上ではなくて君だ。徹頭徹尾、君のせいだ」という言葉に変わり、さらには、「君は礼節もなく要求し、感謝もなく受けとった。君は私の出費で生活する一種の権利があると思うようになった」などと金銭のことにまで及ぶようになる。お金のことを言い出すようになれば、友情も夕暮に近づいた証拠であろうが、しかし、獄中でこういう腹立たしき、悔しさにワイルドが呻吟したことと、彼のイエスとの出会いは無縁ではなかろう。

ワイルドは獄に下ることによって、裏切られた者の悲しみを知った。そして、その悲しみを知っていた者がもうひとりいた。イエスである。イエスを裏切ったのはユダだけではない。イエスが十字架にかけられたとき、弟子たちは皆、クモの子を散らすように逃げてしまった。ワイルドが獄に下ったとき、ダグラスはロクに手紙もくれなかった。「私は裏切られた」と彼は思ったであろう。そういう自分の境遇とイエスの境遇が似ていると思っただろう。

相手の悲しみにたいして想像力がまるで働かないダグラスとつきあって、想像力がないということがどんなものであるかを身をもって知ったワイルドだけに、相手の悲しみの根源を感じるとイエスの想像力に深く感動した。ワイルドはイエスの「詩的正義」の生きざまを、美しいと言った。そう言ったところが、いかにもワイルドらしい反応である。普通なら、「神聖な」とか「偉大な」と形容するところである。ちなみに、ここで言う「美しい」とは、視覚的に「美しい」というのではなく、目に見えないものの美しさ、精神の美しさである。「詩的正義」は外側の形によって判断しないで内側の価値を洞察する。そのような想像力をもつイエスを、ワイルドは美しいと言う。獄中生活において、イエスにそのような美を見たというところが、ワイルドらしい個性の表れであり、同時に、ワイルド